18 寄生マダニの除去法に関する考察

内川 公人 (信州大・医・寄生虫学)

How to treat ticks biting on dermis

Uchikawa, K. (Dept. Parasitol., Shinshu Univ Sch. Med.)

皮膚に寄生するマダニ属の個体を切除した標本を見ると、組織の相当深部に出血があり、そこまで鉗角が及んでいたことが判る。しかし、切除された虫体を調べると、鉗角が口下片の先端のレベルまで引き込まれている例が多い。このことは、生存中に刺激を加えると鉗角の使用を中断すること、および切除の際に口下片の深さまで取り除けば充分であることの2点を示唆する。また、ヤマトマダニとシュルツェマダニとでは、咬着する様子が異なり、前種の方が小切開で取り除きやすい。したがって、担当する医師が事前に寄生マダニを同定していれば、手加減して除去することが可能になる。局部麻酔を用いることが多いので、細かいピンセットで寄生虫体の前端部を固定して引き抜き、破損、残存する口器をえぐり取る方法も一考に値する。マダニと共に切除する検体を病理組織検査に出すことの意義について、再考を促したい。

20 屋内塵中のチャタテムシ数およびその抗原量の季節消長

○武藤敦彦、田中生男 (日環センター)、
尾上洋一 (富山医科薬科大学・小児科)、
村上巧啓 (富山赤十字病院・小児科)
Seasonal prevalence in the number of
Liposcelis spp. and amount of its allergen
in house dust.
Muto A., Tanaka I., Onoue Y. and Murakami G.

チャタテムシは屋内塵中にも多く存在し小児喘息児の20%以上がこれに感作されていることが知られ、吸入性抗原としての重要性が指摘されている。

神奈川、富山、福岡の計7家屋で採取した屋内塵中の月別のチャタテムシ(主にヒラタチャタテ)数を観察し、一部についてはCAP-RAST抑制試験により抗原量(抗原蛋白量)を測定した。個体数は全体的に夏から秋に増加する傾向がみられたが、冬や春に多い家屋もみられた。また、同じ時期で比較した場合、家屋によって10倍以上の差が認められ、さらに年間を通じて多い家屋と少ない家屋があり、全84サンプルの最小値は0、最大値は212個体/g dustであった。抗原量の測定結果もほぼ同様の傾向を示し、非常に少ない家屋から2000 μ g/g dustを越えるものまで幅がみられ、また、検出個体数と抗原量の間には相関が認められた。

19 カーペットの使用期間と室内塵性ダニ類の発生の関係について

○橋本知幸・田島文忠(日環センター)・石井明・松岡裕之(自治医大)

An experiment of mite contamination to tile carpet.

Hashimoto T., Tajima F., Ishii A., Matsuoka H.

一般家庭で使用されるカーペットの、ダニ汚染の進行の仕方を見るために、実際の居住宅で、1年間にわたって実験調査を行った。対象住宅は川崎(家族・戸建)、松戸(家族・戸建)、越谷(単身・同一アパート内の3軒)の計5軒。各住宅の1室に、50cm角のタイルカーペットを敷き込み、1ヶ月毎、3ヶ月毎、6ヶ月毎に交換するカーペットを決めた。この間、居住者は通常の生活や掃除をし、所定期間後、各カーペットから掃除機で室内塵を採取し、細塵中のダニ類を飽和食塩水浮遊法で調べた。各カーペット1枚あるいは1ヶ月当たりの平均細塵量、また単位重量あるいは単位面積当たりのダニ数等について考察した。

21 ELISA法による室内塵中のダニアルゲン量調査結果

(○) 奈 和寿 (都多摩川保健所)

Investigation on the mite allergen of house dust by ELISA method.

Naito K. (Tamagawa Health Center, Tokyo)

ELISA法(酵素免疫測定)を用いて住居内のダニアレルギー調査を実施したので概要を報告する。対象は一般住居を主とし、一部事務所ビルでも実施した。調査全数は家屋57件、検体数198件である。その内訳は、寝具系69件、畳系49件、カーペット系26件、フローリング系10件、その他の床材8件、調度品等36件である。

室内塵は掃除機(1分/㎡)を用いて採取。平成7年5月から8年10月まで実施した。検査はELISA法の定法に従い検体を処理している。その結果、ダニアレルギーはカーペット>畳>寝具>フローリングとなった。調度品等の検査では、蛍光灯の傘やエアコンのフィルターではきわめて微量にすぎなかった。